

学会だより

第 93 回 日本消化器内視鏡学会総会

五十嵐良典

〔東邦大学医学部消化器内科(大森)〕

第 93 回日本消化器内視鏡学会総会は、2017 年 5 月 11 日から 13 日まで大阪中之島の大阪国際会議場(グランキューブ)とリーガロイヤルホテルにて開催された。飯石浩康会長(大阪国際がんセンター・市立伊丹病院)のもと、大阪国際がんセンターのスタッフの協力により開催された。2017 年 3 月末に大阪府立成人病センターが新病院の大阪国際がんセンターへ移転することが重なり、たいへんな労力を使われたとのことであった。また 1987 年の第 33 回総会(奥田茂会長)、2005 年の第 70 回総会(竜田正晴会長)に続いて 3 回目の総会担当であり、消化器内科の歴史の重みを感じられた。

田尻久雄理事長による理事長講演では、「故丹羽寛文先生 追悼講演—温故知新」と題して、2017 年 2 月 25 日に逝去された丹羽寛文名誉理事長(享年 87 歳)について、講演が行われた。東大の第一内科時代の胃カメラ、十二指腸カメラ、大腸カメラの開発からファイバースコープ、電子スコープ開発の業績や、防衛医大での教授、院長としての後進の育成について講演された。また内視鏡学会の理事長時代には、世界への内視鏡技術の普及、とくにアジアへの内視鏡技術の普及・教育に情熱を傾けられた。小生も、ベトナム、韓国、中国、香港の学会、研究会などに丹羽先生と一緒に参加させていただき、たくさんの方の事を直接指導していただいた。

飯石会長による会長講演では、「大阪府立成人病センターとともに」と題して、大阪府立成人病センター(現大阪国際がんセンター)とともに過ごされたご自身の研究生活についての思い出を中心に講演され、消化器内科医を目指した理由、奥田先生や竜田先生との出会いを語られた。また、コンゴレッド染色、コンゴレッド・ガストリン染色、コンゴレッド・メチレンプ

ルー染色などの研究について語られた。

今回、大阪、香港、シンガポール、ハイデラバード(インド)からライブ中継が行われた。多施設、多国からの中継であった。初日の午前中の消化管ライブは、出足は悪かったが途中から満席になり、午後の胆膵ライブでは、ほぼ満員であった。機材も症例にも大きなトラブルもなく順調に終了した。

また、JGES で継続的に企画している JGES Core Session「Innovative Therapeutic Endoscopy」—ワークショップとして、胆膵セッションで「悪性胆道狭窄」、下部消化管セッション「下部消化管の腫瘍性病変」、上部消化管セッションとして「上部消化管」が企画され、胆膵セッションを拝聴した。たくさんの方の聴衆が参加していたが、演題内容としては、新しい試みも多く発表されていた。しかし過去に話題になった発表も散見された。先達の論文をしっかり把握しておく必要があると思われ、「温故知新」という言葉が今こそふさわしいと考えられた。

2 日目の午後にパネルディスカッション「十二指腸乳頭部腫瘍における内視鏡診断と局所治療」の司会を担当した。適応としては十二指腸乳頭腺腫を扱うことでよいと思われるが、術前の画像診断能が約 80%であり、術中、術後の合併症も多く認められていた。切除断端陽性例、とくに垂直断端陽性例の取り扱いを深く討議する必要がある、また病理の診断についても、検体の取り扱いなどが決まっていないことが多く、今後の検討すべき課題が明らかになったと思われた。

学会は、好天のもとに始まり、最終日が雨に降られ心配したものの、6,000 名を超える参加者を認め、盛会のうちに終了した。